

がん細胞レーザーで死滅

サ ファイアやメタルのチップを使った半導体レーザー

で、がん細胞を温めて死滅させる治療装置を開発している。がん細胞は正常な細胞に比べて熱に弱い特徴があるため、2012年に子宮頸がん用装置の研究を名古屋大と共同で始めた。今夏から臨床試験に入った。

電気やラジオ波などで温める装置があったが、使用時にやけどの恐れがあり、顕著な効果も出ていないことから普及していきな

なかむら 中村

せいじ 誠司社長

愛知学院大法学部卒。1980年、大手医療機器メーカーに入社。医療用レーザーメーカーを経て2003年に飛鳥メディカル設立、社長に。医療用レーザーの開発、輸入販売からスタートし、輸入販売からスタートし、



近年は子宮頸がんの温熱療法装置の開発に力を入れる。広島県出身。58歳。

飛鳥メディカル

(京都市下京区)

方、レーザーは適切な出力で使えば危険性はなく、水の透過性が高いため深部まで使えるという。

外科手術をはじめ、放射線や抗がん剤による治療はそれぞれ副作用を伴うが、レーザー温熱治療は、中村誠司社長は「レーザーは温度を制御しやすい上、レーザー

開 発中の装置は内視鏡機能を開

の光自体に不要な細胞を殺す効果がある」と優位性を強調する。搭載し、レーザーの出力を制御している。医師が目で直接確認しながら、対象のがん細胞にピンポイントでレーザーを照射できる。動物実験では成果が出ているといい、「レーザー温熱治療が新しいがん治療の方法として認められれば、多くの患者が苦痛から解放される」と信じる。

レーザーを使った医療装置では、すでに手術用のレーザーメスをヒト用と動物用で販売している。切開用の針「フクロフ」にメタルを採用し、切りやすく、侵襲範囲が小さい製品を実現した。

従業員は現在21人で、東京と大阪に事務所を構える。京都市ベンチャー企業目利き委員会からはAランクの認定を受けた。中村社長は、以前勤務していた医療機器メーカーで培ったノウハウや大学のネットワークを生かして研究開発のスピードアップを狙う。



子宮頸がんを狙ったレーザー温熱治療装置の試作機

(京都市下京区・飛鳥メディカル本社)

(猪口健司)